

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330174

研究課題名(和文) 追跡研究を用いた貧困・虐待・発達障害等への「根拠」に基づく早期支援方法の解明

研究課題名(英文) Development of Evidence Based Early Intervention Methods for children of Poverty, Abused and Developmental Disabilities by a Cohort Study

研究代表者

安梅 勅江 (Anme, Tokie)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：20201907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円、(間接経費) 4,230,000円

研究成果の概要(和文)：貧困・虐待・発達障害など気になる子どもへの早期支援に向け、質の高い保育への関心が高まっている。本研究は、経年的な子どもの発達、社会適応、健康状態、問題行動の発現への影響を踏まえ、貧困・虐待・発達障害など気になる子どもへの科学的な根拠に基づく早期支援方法の解明を目的とした。

全国の0～6歳児と保護者への12年間パネルコホート調査を用い、子どもの特異性に発達の軌跡と関連要因について分析した。その結果、特に家庭における保護者のかかわりの質と量など、家庭環境要因のその後の子どもの発達や問題行動への影響の大きさを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：With increasing numbers of children of poverty, abused, and developmental disabilities, there is a need for high quality childcare. This study sought to compare the effects of child environment on the development, adaptation, health, and problem behavior of young children in care after twelve years.

Parents completed a survey on the childrearing environment at home, their feelings of self-efficacy, and the presence of support for childcare. Childcare professionals evaluated the development of children. The results of multiple regression analysis indicate that factors in the home environment explained developmental risks several years later.

研究分野：発達保健学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉

キーワード：追跡研究 気になる子ども

1. 研究開始当初の背景

- (1) 子どもと保護者への社会支援の必要性が高まる中、乳幼児期の早い時期に貧困、虐待、発達障害など「気になる子ども」への適切な支援を開始することが、保育園、幼稚園、認定子ども園など乳幼児期の子育て支援機関において強く求められている。ここでの「気になる子ども」とは、特に支援の必要性の高い、何らかの配慮を要する子どもと定義付ける。
- (2) 日本においては、これまでに全国の園児を対象とした経年的な大規模データを用いて、就学後の子どもの育ちまで追跡した科学的な根拠に基づき「気になる子ども」への支援プログラムを提案した研究はまったく存在しない。
- (3) 欧米先進国においては、英国の 52 年追跡コホート研究をはじめ、国レベルで出生から 15 年以上におよぶ大規模コホートプロジェクトを立ち上げ、これらの課題に取り組んでいる。
- (4) われわれは過去 12 年にわたり、子育て支援や家庭環境が、子どもの発達や社会適応、健康状態に及ぼす影響を追跡研究してきた。その結果、質の高い子育て支援を確保すれば、家庭における適切な子どもへのかかわりや、保護者の育児への自信、保護者へのサポートが、子どもの経年的な発達状態、健康状態、問題行動などに影響していることを明らかにした。
- (5) これら科学的な根拠に基づき、「保育の質の評価指標」「園児の発達評価指標」「家庭環境の評価指標」「気になる子どものスクリーニング指標」を開発し、子どもの健やかな発達と保育の質の関連性を検討し、証拠に基づく評価基準を作成し、活用のための研修会を開催してきた。

2. 研究の目的

- (1) コホート研究の成果をさらに発展させ、思春期まで追跡した根拠に基づき乳幼児期の子育て支援機関における科学的な根拠に基づく「気になる子ども支援プログラム」を開発し、実用化を図るものである。
- (2) 気になる子どもの特性別に、発達の軌跡と関連要因に関する学術的な知見を得ることを目的とする。
- (3) 保育園、幼稚園、認定子ども園など、乳幼児期の支援機関における気になる子どもへの支援の充実に資することを意図する。

3. 研究の方法

- (1) 全国の 0 歳～6 歳児と保護者を対象に、毎年 3,000 組ずつ平成 11～22 年の 12 年間パネルコホート研究を継続したデータの卒園児に対する郵送追跡調査を実施した。
- (2) 支援プログラム効果検証のための在園児 3,000 名に対する質問紙調査と訪問面接調査を実施し、「気になる子ども」の特性別の発達軌跡と影響要因、支援効果に関する科学的な根拠を提示した。
- (3) 乳幼児期から思春期に及ぶ長期大規模コホートデータを用い、思春期・学童期の子どものウエルビーイングを目的変数に、乳幼児期の貧困、虐待などの家庭環境要因、発達障害など子どもの特徴要因、保護者のストレスなどの保護者特徴要因、社会サポート要因などを説明変数に、複合的な関連性について多変量軌跡分析を用いて検証し、子どもの発達軌跡に影響する要因を解明した。
- (4) 要因分析に介入研究を加え、科学的な根拠に基づく「気になる子ども支援プログラム」の開発を行った。

4. 研究成果

- (1) 「気になる子ども」の特性別の発達軌跡と影響要因、支援効果に関する科学的な根拠の提示

全国の 0 歳～6 歳児と保護者を対象に、毎年 3,000 組ずつ平成 11～22 年の 12 年間パネルコホート研究を継続したデータの卒園児に対する郵送追跡調査を実施した。併行して支援プログラム効果検証のための在園児に対する質問紙調査と訪問面接調査を実施し、「気になる子ども」の特性別の発達軌跡と影響要因、支援効果に関する科学的な根拠を提示した。

卒園児の調査内容は、身体的精神的ウエルビーイング状態、家庭環境、社会サポート状況、健康状態、社会適応、家族と子どもの属性などであった。

気になる子どもの経年的な発達状態、健康状態、社会適応、問題行動の推移を勘案しながら、思春期・学童期のウエルビーイングを目的変数に、乳幼児期の関連要因を説明変数として多変量解析により影響度の強さを明らかにした。具体的には、家庭環境要因（保護者とのかかわり、友人とのかかわり、社会的なかかわり、虐待傾向、経済状態など）、社会サポート要因（子育て支援の状態、連携など）、保護者特性要因（周産期からの育児ストレス、健康状態、就労、年齢など）、子ども特性要因（身体・精神面の健康状態、気になる行動、気質など）、家族特性要因（家族構成、きょうだいなど）、保育環境要因（保育利用時間、保育開始年齢など）の複合的な

影響を捉えた。

気になる子どもの発達状態、健康状態、社会適応、問題行動などの評価は、欧米で開発され日本で標準化された評価指標を活用し、海外既存研究と比較検討が可能な客観的な評価手法を用いた。

幼児期の家庭環境におけるかかわりが、思春期におよぶ子どもの育ちに影響していることが明らかにされた。

(2) 科学的な根拠に基づく「気になる子ども支援プログラム」の開発

1)海外コホート研究の根拠に基づく「気になる子ども支援プログラム」の開発過程、内容、評価に関する系統的レビュー、2) 思春期に及ぶ大規模コホートデータの分析結果、3) 保護者と子育て支援専門職のフォーカス・グループインタビューにより得られた情報、4)開発した「保育の質の評価指標」、5) 気になる子どもへのプログラム実施によるプロセス評価、6) プログラム実施のアウトカム評価を総合的に分析し、統計的妥当性及び臨床的重要性を加味しながら、有効な項目を抽出して体系化し、「気になる子ども支援プログラム」を開発した。

(3) 「気になる子ども支援プログラム」の実践活用モデルの提案

実践の場において、「気になる子ども支援プログラム」を十分に活用するために、具体的な活用につながるさまざまな形のモデルを提示した。

気になる子どもの特性別に、子ども、保護者、専門職、子どもの友人、近隣地域などに向けて、実際にプログラムを活用する際の目的、方法、進め方のコツ、把握する必要のあるポイント、予測される成果などを詳細に解説した書籍およびホームページを作成し広く利用可能とした。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

Tokie Anme, Validity and Reliability of the Index of Child Care Environment (ICCE), Public Health Frontier, 2(6), 2013, 141-145, DOI:10.5963/PHF0203003 査読有

Tokie Anme, Validity and Reliability of the Social Skill Scale (SSS) as an Index of Social Competence for Preschool Children, Journal of Health Science, 3(1), 2013, 5-10, DOI: 10.5923/j.health.20130301.02 査読有

Emiko Tanaka, Tokie Anme, Factors related to Social Competence Development of thirty-month-old;

Longitudinal Perspective, Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services, 19(1), 2013, 21-30, 査読有

Tokie Anme, Health of School-Aged Children in 11+ Hours of Center-Based Care, Creative Education, 3(2), 2012, 263-268, DOI:10.4236/ce.2012.32041 査読有

Tokie Anme, Validity and Reliability of the Interaction Rating Scale between Children (IRSC) by Using Motion Capture Analysis of Head Movement, Public Health Research, 42(10), 2012, 2457-2478, DOI: 10.5923/j.phr.20120206.06 査読有

Lian Tong, Tokie Anme, Early Development of Empathy in Toddlers: Effects of Daily Parenting; Child Interaction and Home-Rearing Environment, Journal of Applied Social Psychology, 42(10), 2012, 2457-2478, doi: 10.1111/j.1559-1816.2012.00949.x 査読有

Tokie Anme, Ryoji Shinohara, Yuka Sugisawa, A pilot study of social competence assessment using Interaction Rating Scale Advanced (IRSA), ISRN Pediatrics, 2011, 2011, 1-6, doi:10.5402/2011/272913 査読有

Emiko Tanaka, Ryoji Shinohara, Tokie Anme, et al, Relationship between early mother-child interaction and children's social competence development at 42 months old: A longitudinal perspective, Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services, 18, 2011, 69-76, 査読有

Lian Tong, Tokie Anme, Predictors of working mother's parenting practices in infancy on the competences of vocabulary and communication of two-year-old children. Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services, 18, 2011, 94-101, 査読有

[学会発表](計7件)

安梅勅江、地域ぐるみの根拠に基づく子育て子育てエンパワメントのプロ育成、日本保育学会、2012.5.5、東京
Yukiko Ishii, Lian Tong, Ryoji

Shinohara, Tokie Anme, Maternal stress, parenting factors, experiences in day care, and developmental outcomes in 5-year-old children in day care in Japan, 8th SYSTED, 2011.9.17, Tokyo

Etsuko Tomisaki, Tokie Anme, The trajectory of children's social skill from 2 to 4 year-olds and their waking up patterns, 8th SYSTED, 2011.9.17, Tokyo

〔図書〕(計8件)

安梅勅江、エンパワメント科学研究会、エンパワメント科学入門、2014、115

安梅勅江他、黎明書房、親から頼りにされる保育者の子育て支援 気になる子も、気になる親も一緒に保育根拠に基づく子ども支援 -子育て・子育てエンパワメント-、2012、251

安梅勅江他、日本小児医事出版社、保育パワーアップ講座 活用編、2012、178

安梅勅江他、日本小児医事出版社、保育パワーアップ講座 基礎編、2011、152

〔その他〕

ホームページ等

保育パワーアップ研究会

<http://square.umin.ac.jp/Child/>

子育て子育てエンパワメントに向けた発達コホート研究

<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/e.cd/>

Empowerment for Child Development and Child Care: Evidence from Cohort Study

<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/e.cd/index-e.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

安梅 勅江 (ANME TOKIE)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：20201907

(2)研究協力者

田中 裕 (TANAKA HIROSHI)

大宝保育園・園長

酒井 初恵 (SAKAI HATSUE)

小倉北ふれあい保育所・主任保育士

宮崎 勝宣 (MIYAZAKI KATUNOBU)

路交館あすなろ保育園・副園長

城戸 裕子 (KIDO YUKO)

どろんこ保育園・園長

小林 昭雄 (KOBAYASHI AKIO)

みのり保育園・保育士

天久 薫 (AMAHISA KAORU)

社会福祉法人四季の会・理事長

枝本 信一郎 (EDAMOTO SINITIRO)

社会福祉法人路交館聖愛園・理事長

渡辺 多恵子 (WATANABE TAEKO)

日本保健医療大学・看護学科・准教授

田中 笑子 (TANAKA EMIKO)

筑波大学・人間総合科学研究科・研究員

富崎 悦子 (TOMISAKI ETSUKO)

上智大学・看護学科・助教

澤田 優子 (SAWADA YUKO)

筑波大学・人間総合科学研究科・研究員

童 連 (TONG LISN)

筑波大学・人間総合科学研究科・研究員

恩田 陽子 (ONDA YOKO)

筑波大学・人間総合科学研究科・研究員

望月 由妃子 (MOCHIZUKI YUKIKO)

筑波大学・人間総合科学研究科・大学院生

徳竹 健太郎 (TOKUTAKE KENTARO)

筑波大学・人間総合科学研究科・大学院生

呉 柏良 (WU BAILIANG)

筑波大学・人間総合科学研究科・大学院生

川島 悠里 (KAWASHIMA YURI)

帯広市・保健師

難波 麻由美 (NANBA MAYUMI)

青森県・保健師